

2016年1月18日(月)

国際連語論学会会員各位

国際連語論学会会長

高橋弥守彦

国際連語論学会第4回大会についてのお知らせ

標記の件、下記のとおり行われますので、会員各位におかれましては万障お繰り合わせのうえ、ご出席くださいますようお願い申し上げます。

日 時：2016年2月13日(土) 14日(日) 9:00~18:00

会 場：大東文化会館ホール(JR池袋駅より東武東上線各駅停車東武練馬駅下車徒歩4分)

プログラム：別紙参照

第4回大会参加費：500円(会員、非会員共通)

※1. 研究発表者の各位におかれましては資料を70部ご用意くださり当日お持ちください。

※2. 研究発表者はメール(添付)で1週間前に発表用の資料を司会者にお送りください。

※3. 年間会費(社会人2000円、院生・学生1000円)を受け付けます。また、新入会員の受け付けも致します。

※4. 学会誌：当日は年間会費をお支払いの会員の皆様に学会誌(『研究会報告第38号』)をお渡しいたします。

※5. 懇親会：国際連語論学会名誉会長鈴木康之先生を囲んでの懇親会です。(日時：2月13日(土) 18:00~20:00 場所：大東文化会館K-402 会費：1000円)

※6. 特別プログラム(講演)

今回は国際連語論学会研究発表のため、中国から多くの研究者が参加してくださるので、須田義治(大東文化大学博士課程指導教授)、高橋弥守彦(大東文化大学博士課程指導教授)、鈴木康之(大東文化大学名誉教授、元博士課程指導教授)の講演による下記のような特別プログラムを組ませていただきました。お時間のある方は奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。心から歓迎いたします。

日時：2月15日(月) 9:00~12:00

場所：大東文化大学板橋校舎1号館4階419教室

ヒトとテーマ：須田義治(仮題：日本語の aspekto について)

高橋弥守彦(仮題：使役表現における中日両言語の視点について)

鈴木康之(仮題：日本語の連語について)

※7. 司会、研究発表者、シンポジウム発言者の皆様に対しては、担当当日分だけ粗餐(昼食)をご用意させていただきます。以上

国際連語論学会第4回大会のお知らせ（2015年度）

日 時：2016年2月13日（土）午前9時00分より午後6時00分

会 場：大東文化会館ホール 第4回大会参加費：500円（会員、非会員共通）

プログラム

受付（9：00～） 総合司会 劉爾瑟（大東文化大学博士後期課程）

開会の辞 許慈惠（中国・上海外国語大学） 9：30－9：40

1. 『語言自邇集（初版，1867）』における助動詞“想”と“要”について 9：40－10：15

蘇秋韵（大東文化大学博士前期課程）

2. 中国の古代漢語の韻尾 n・m における日本語の訓読みへの影響について—ナ行を中心に
成玉峰（南京林業大学） 10：15－10：50

3. 格助詞「で」の本質的意味への再考察—中国語の訳文を通して 10：50－11：25
許慈惠 蔡妍（上海外国語大学） 以上司会 安本真弓（高千穂大学）

休憩（15分：11：25－11：40）

4. 中国語における連語論の活用について—現代中国語の存在文と“在字句”の構造を比較
して— 洪安瀾（大東文化大学博士後期課程） 11：40－12：15

5. 日中同形語の共起語について—名詞の日中同形語と名詞の共起語を中心に—

何 龍（愛知淑徳大学博士後期課程） 12：15－12：50

以上司会 竹島毅（大東文化大学）

昼休み（60分 近くにレストラン多数あり） 12：50－13：50

6. 容器と有界移動事象への解釈により起こる非対称性について—経験基盤主義から
神野智久（大東文化大学博士後期課程） 13：50－14：25

7. 中国語結果構文の多義性の産出メカニズム—後項動詞の使役化の残存
李鵬（大東文化大学博士後期課程） 14：25～15：00

8. 日中対照研究の視点から見る日本語連体修飾節のテンス・アスペクト 15：00－15：35
孫海英（北方工業大学） 以上司会 石井宏明（東海大学）

休憩（15分：15：35－15：50）

9. 無対自動詞の結果達成性について 15：50－16：25
汪然（南京林業大学）

10. 日中両言語における「ねずみ」を含む成句に関する一考察 16：25－17：00
李所成（北京外国語大学）

11. 関数検定からみるタラ条件文の日中対照 17：00－17：35
李光赫（大連理工大学） 以上司会 続三義（東洋大学）

閉会の辞 鈴木泰（専修大学） 17：35－17：45

懇親会 大東文化会館 K-402 司会 高橋弥守彦（大東文化大学） 18：00－20：00

※当日入会申し込み、学会費（年会費：社会人 2000円、院生 1000円） ※懇親会費 1000円

国際連語論学会第4回大会のお知らせ（2015年度）

日 時：2016年2月14日（日）午前9時00分より午後5時55分まで

会 場：大東文化会館ホール 第4回大会参加費：500円（会員、非会員共通）

プ ロ グ ラ ム

受付（9：00～） 総合司会 神野智久（大東文化大学博士後期課程）

開会の辞 李光赫（大連理工大学） 9：30～9：40

1. 日本語受身文の成立条件再考 9：40～10：15

劉爾瑟（大東文化大学博士後期課程）

2. 《老乞大》の四種の刊本における“把”構文の対照研究 10：15～10：50

小路口ゆみ（大東文化大学博士後期課程） 以上司会 丁鋒（大東文化大学）

休憩（15分：10：50～11：05）

3. ノデIで表す原因・理由文の日中対照研究 11：05～11：40

湯 明显（名古屋大学文学研究科 博士後期課程）・李 光赫（大連理工大学）

4. 日中両言語の可能表現に関する一考察 11：40～12：15

魏美平（大東文化大学博士後期課程）

以上司会 田中寛（大東文化大学）

昼休み（60分 近くに食堂多数あり） 12：15～13：15

シンポジウム：連語論研究の現在（鈴木康之先生ご挨拶） 13：15～14：35

鈴木泰（専修大学教授） 王学群（東洋大学） 高橋弥守彦（大東文化大学）

司会 続三義（東洋大学）

5. 中国語の「時量詞＋（*的*）＋目的語」構文における「*的*」の生起と時量詞強調効果について台湾人を対象とした一考察 福本陽介（名古屋産業大学） 14：35～15：10

6. “上＋客体”を基本構造とする“上”の文成分について 15：10～16：45

高橋弥守彦（大東文化大学） 以上司会 大島吉郎（大東文化大学）

休憩（15分 15：45～16：00）

7. 日中対訳傾向から見るバ条件文の実証的研究 16：00～16：35

鄒善軍（大連理工大学ソフトウェア学院）

8. 格助詞「に」の本質的意味への一考察 —— 「に」格名詞と動詞との意味関係を通して

許慈恵 張莉（上海外国語大学） 16：35～17：10

9. 連体詞をめぐって——中国人向けの日本語教育文法の構築の観点から 17：10～17：45

彭 広陸（中国・東北大学秦皇島分校）

以上司会 須田義治（大東文化大学）

閉会の辞 鈴木康之（国際連語論学会名誉会長） 17：45～17：55

※当日入会申し込み、学会費の納入も受け付けます。（年会費：社会人2000円、院生1000円）

司会：2月13日（土）

安本真弓（高千穂大学）：yasumoto@cap.ocn.ne.jp

竹島毅（大東文化大学）：sisi@kkd.biglobe.ne.jp

石井宏明（東海大学）：shihong_0730@yahoo.co.jp

続三義（東洋大学）：xu_sanyi@toyo.jp

※研究発表者と概要

13-1. 蘇 秋韻（大東文化大学大学院）

テーマ：『語言自邇集（初版，1867）』における助動詞“想”と“要”について

要旨：『語言自邇集』は1867年にイギリス人のトーマス・フランシス・ウェードによって編纂された西洋人向けの北京官話のテキストである。当書は中国語教育史においては最初の北京語のテキストであり、会話文の形式を用いて19世紀中期の北京現地の話し言葉を反映しており、当時の北京語を研究する上で重要な研究資料として知られている。『語言自邇集』は中国語史研究においても、教育史においても極めて重要な文献であり、1867年初版本、1886年第二版、1903年第三版のあることが知られている。本稿に用いるのは1867年に出版された初版である。初版には「散語四十章」、「問答十章」、「續散語十八章」、「談論篇百章」、「言語例畧（十三段）」などが配列されている。

筆者は19世紀中期以降の北京語の助動詞の状況を研究するために『語言自邇集（初版，1867）』を言語資料として“想”と“要”を中心に調査を行い、当時の助動詞“想”と“要”の用法、意味、文法的な特徴を明らかにする。そして、現代中国語における助動詞“想”と“要”と比較し、その歴史的な変遷の経緯を明確にしたい。

13-2. 成玉峰（南京林業大学）

テーマ：中国の古代漢語の韻尾 $n \cdot m$ における日本語の訓読みへの影響について—ナ行を中心に

要旨：日本の学者は語源学の視点から日本語の訓読みを深く研究している者は少なくないが、中国の古代の古音韻の視点から（について）の研究はまだ少ない。それに比べ（ると）、中国の学者のこれらについての研究はもっと少ない方である。一般的には日本語の訓読は和語のそもそもの発音だと思われる。本研究は中国の古代漢語の韻尾 $n \cdot m$ から、語源学の理論にもとづき（基づき）、実証と対比の研究法を用い、日本語の音声変化の規則を通して、ナ行を中心に日本語の漢字の音読みと訓読みを徹底的に調べた。そこから日本語の訓読みはどうやって中国の古代漢語の音韻から日本語の音読みへ、また日本語の訓読みへと変化したのかを探し出した。最後に、これらの調査結果に踏まえて今までの先行研究と違った、中国の古代漢語の音韻が日本語のナ行の訓読みへ大きな影響を与えたのを説明し、またこの説を学習者の漢字の読み方の勉強にも生かして欲しいと望んでいる。

13-3. 許慈恵 蔡妍（上海外国語大学）

テーマ：格助詞「で」の本質的意味への再考察—中国語の訳文を通して

要旨：格助詞「で」には複数の意味項があり、前接名詞と後続動詞の意味特徴および両者

の結合により、そのうちの 하나가実現される。本研究では、コアスキーマ理論に基づき、格助詞「で」には前接名詞が後続動詞の意味実現の「依拠物」または「依拠事」であるという本質的意味が存在し、あらゆる意味項に貫かれているということを主張する。(許慈恵、蔡妍 2015.2)。そのことを中国語の訳を通して再確認したい。

格助詞「で」の意味用法を中国語に訳せば、ほとんど“用”、“靠”、“以”、“因”、“为(了)”、“在”などの「介詞」と対応するであろう。中国語の介詞は、ほとんどが動詞派生であり、文法化程度の強弱こそあれ、多少なりとももとの動詞的意味合いが残っている。しかし、それらはいずれも“凭借”(依拠する)という動詞的意味である。そのうち、“在”(「存在する」の意味)はやや特殊のように思われるが、人間が空間を依拠(利用)して何かをすること捉えることができるだろう。すなわち人間が空間に存在することで物事を行うことであり、結局他の場合と同様に空間を依拠物としている、と言えるであろう。

13-4. 洪安瀾(大東文化大学博士後期課程)

テーマ：中国語における連語論の活用について—現代中国語の存在文と“在字句”の構造を比較して—

要旨：中国語の“放”は「動態」(例1)と「静態」(例2)という2つの段階を意味することができる。

(1) (他) **放**了一本书在桌子上。→彼は本を一冊テーブル上に置いた。(作例)

(2) 桌子上**放**着/了一本书。→テーブル上には(一冊の)本が置いてある。(作例)

単に中国語の動詞“放”を見れば、「何かを置く」という動作を表すのか、それとも「どこかに置いてある」を表すのか判断できない。中国語には、「机に本を置く。」と「本が机に置いてある。」のような日本語の自動詞と他動詞の使い分けはないが、その代わり、連語の語順の違いを利用して、その2つの段階の区別を表している。

すなわち、“放”という言葉が一類の人間の出来事を名づけている。連語が更にその出来事の「動的」と「静的」の段階を区別する。最後に、文は「いつ、どこで、どのように」のような状況語、「何回、いくつ」などの数量詞そして語気助詞などの文成分を加えて、更に具体的な場面を叙述するのであろう。

本稿は“在字句”(例1)と存在文(例2)に用いられる動詞、そして文の語順を比較して、“在字句”と存在文における「連語」の範囲を定めて、連語論の観点をいかに活用するかについての試みをする。

13-5. 何 龍(愛知淑徳大学博士後期課程)

テーマ：日中同形語の共起語について—名詞の日中同形語と名詞の共起語を中心に—

要旨：本稿は日本語の品詞と中国語の品詞がともに名詞である二字日中同形語を対象として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と《国家语委现代汉语平衡语料库》を用いて、その前方共起語と後方共起語を収集し、分析した。そして、中国人の日本語学習者が母語の影響を受ける立場に立ちながら、数が最も多かった「名詞+名詞の日中同形語」と「名詞の日中同形語+名詞」の二つのパターンに注目した。その結果、「科学技術」のような同じ

く名詞で使われている日中同形同義語は同じ共起語を取ることが分かった。しかし、同じく名詞で使われている日中同形同義語は必ずその共起語が同じとは限らない。例えば「既婚女性」と“革命女性”のような異なる共起語を取る場合がある。さらに、同じ名詞である日中同形同義語は日本語の方はよく名詞と共起するのに対して、中国語の方はあまりに名詞と共起しないことが分かった。それゆえに、中国人の日本語学習者は母語に影響され、同じ名詞である日中同形語を使用する際に、母語は日本語と異なる共起語を取るため、誤用を起こす可能性があると考えられる。実際に日本語学習者作文コーパスを検索した結果、その誤用を起こす作文例も見出した。

13-6. 神野智久（大東文化大学博士後期課程）

テーマ：容器と有界移動事象への解釈により起こる非対称性について—経験基盤主義から
要旨：本稿では、着点への移動を表す“進 (V 進 y)”と起点からの移動を表す“出 (V 出 y)”には非対称性が見られることを言語事実から指摘し、その理由について、経験基盤主義 (Experimentalism) の見地から、更には認知意味論、発達心理学、認知心理学の成果を積極的に取り入れることにより考察を行う。

起点からの移動を表す動詞や副詞の多義性は、認知意味論の角度から、これまで多くの蓄積があり、いずれの研究も、多義性と認知能力の関わりについて十分な説明がなされている。(cf.Lindner (1981)、山梨正明 (2000)、Lee (2001)、Andrea and Vyvyan (2003)、靱山・深田 (2003) 韓涛 (2014))。本稿では、これら多義性に関わる認知能力の根底には、容器とそれに関連する身体経験が関わっていると措定する。

13-7. 李 鵬（大東文化大学博士後期課程）

テーマ：中国語結果構文の多義性の産出メカニズム——後項動詞の使役化の残存
要旨 本発表は多義的結果構文“滔滔追累了悠悠”の多義解釈が取れる統語的メカニズムを明らかにすることが目的である。先行研究 (Rint Sybesma(1999)、王・何(2002)、熊(2004、2011、2014)) ではっきりと言及されていない点、即ち後項動詞の使役義が残存することが多義解釈が取れる理由であると主張する。これは古代中国語による歴史的証拠 (楊健萍 (1957))、方言による証拠 (Lisa Cheng, James Huang, Andery Li, Jane Tang(1997)、鈴木 (2015))、現代中国語にある経験的証拠から説明が付く。V₂の使役義はV₁とV₂の間にある意味関数 CAUSE と統語上においてはV₂による独立した使役投射層の両方により保証される。「残存」とはレキシコン部分において“累”が二つ存在し、使役義を持つ“累”と使役義を持たないほうの両方があるということである。結論としては 1、V₂が使役義保留である場合、V₁V₂は常に表層上の主語に指し示す (滔滔追悠悠, 滔滔累了。ただ、機能投射 DoP(hrase)により“滔滔”が最大投射の指定部に移動のを引き起こす (trigger)); 2、V₂が使役義を持たない場合、V₁V₂は表層上の目的語を指し示す (滔滔追悠悠, 悠悠累了); 3、V₂が使役義を保持する場合、構文と意味解釈のミスマッチの“悠悠追涛涛, 悠悠累了”が実現可能の三点が挙げられる。今後の課題としては中国語における機能投射について考えてみる。

13-8. 孫海英（北方工業大学）

テーマ：日中対照研究の視点から見る日本語連体修飾節のテンス・アスペクト

—《鲁迅与我七十年》と『わが父鲁迅』を資料にして—

要旨：本稿は非限定的連体修飾節と主節の意味関係が如何に連体修飾節のテンス・アスペクト的特徴と関わっているかを究明する試みとするものである。《鲁迅与我七十年》(2001)の日本語訳書『わが父鲁迅』(2003)から特定人物を指し示す主名詞が主節の主語とする連体修飾節を抽出し、また、《鲁迅与我七十年》(2001)からその訳文の原文を探し、収集した上、連体修飾節と主節の意味関係（因果・逆接・継起・付帯状況等の場合）を考察の基準にし、次の三点をめぐって考察を行う。一、連体修飾節の述語としての動詞の分類。二、その動詞の「ル形」「タ形」「テイル形」「テイタ」形に現れてくるテンス・アスペクト的特徴。三、連体修飾節に翻訳された中国語原文の表現におけるテンス・アスペクト的特徴。本研究を通して、一見シンタクスの構造が違った中国語表現が日本語連体修飾節への翻訳させられる可能性のありかによって統一されることを観察し、それらの中国語表現に現れるシンタクスの特徴も、日本語の連体修飾節研究を深化させるのにどうも欠かせないものであることも主張したい。

13-9. 汪然（南京林業大学）

テーマ：無対自動詞の結果達成性について

動詞は必要とする名詞の数によって1項動詞、2項動詞、3項動詞といったタイプがある。無対自動詞を項数によって分類してから、各々の時間表現及び主客関係を帰納して記述する。

本稿では時間表現を手がかりとして無対自動詞の結果達成性を帰納しながら分類を行ってきた。0項無対自動詞は基本的には一纏まりの自然現象を表し、1項無対自動詞と2項無対自動詞は共に動作・行為、変化、状態に用いられるが、1項の方は自然現象の表現にも用いられ、2項動詞は自然現象以外の領域に偏るという傾向が見られる。

また、これまでアスペクトにかかわる動詞研究は「している」「していた」との共起関係を目安として動詞分類を行ってきたが、事実として「ある」「いる」と可能動詞以外の動詞は、ほとんど「している」「していた」と共起することが分かる。動作の進行・継続か結果の存続かについて、文脈情報が必要とし、進行・継続・存続が同時に交錯している場合もすくなくないと筆者は考えている。事件を、動作未発生・動作・動作終了という三つの段階に分けて、主体と結果の関係を考察すれば、次のようなことが分かる。

- (1) タイプ0~6、タイプ8~13は、動作が未発生の時点では、動作のもたらず影響や結果が発生しない。同時に、タイプ2・3・4・5・8・9・10・11・12は動作・作用が終わると共に、結果・機能が停止する傾向が見られる。また、タイプ0・1・6・13は動作・作用が終わった後、その結果が続いて存在する傾向が見られる。
- (2) タイプ7と14は、動作の発生と関係なく、主体は既にある性質を有している。

13-10. 李所成（北京外国語大学）

テーマ：日中両言語における「ねずみ」を含む成句に関する一考察

要旨：「ねずみ色」「濡れねずみ」「窮鼠猫を囓む」「鼠目寸光」「老鼠过街人人喊打」「贼眉鼠眼」などのような、「ねずみ」を含む成句(熟語、慣用句、ことわざなど固まった表現)は日本語にも、中国語にも数多く含まれている。これらの成句には日本民族と漢民族のねずみに対する捉え方が反映されている。周知のように、民族が違えば、文化も通常、違う。それゆえ、同じねずみと言っても、日本人に残ったイメージと中国人に残ったイメージもおおのずと違って来る。結論を先取りにして言えば、文化が違えば、ねずみのいろいろな特徴や特性の中でクローズアップされるものも違って来る。そのクローズアップされた特徴、特性がその文化で注目され、それに関する言語表現が生まれ、そしてその言語表現が使われているうちに語彙化が進んできたのである。本稿は日中両言語に含まれる成句を通して、日中両国民のねずみに対する捉え方の違いを探るのが目的である。

13-11. 李光赫 (大連外国語大学)

テーマ：関数検定からみるタラ条件文の日中対照

要旨：今回の対訳例の調査で分かったことを次の三点に纏めることができる。

はじめに、タラ形式は口語文体でよく使われている仮定表現がメイン用法とされているが、本論ではタラ仮定文を三分類「仮定状況・p 事実文・反事実文」したが、その翻訳傾向にも少しずつれが見られた。タラ仮定文は中国語では基本的に“要是 p, 就 q”か“p 的话, q”で表すが、「仮定状況」はそのほかに“一旦 p 就 q”で表す場合もある。その“一旦 p 就 q”は、「反事実」と「p 事実」タラ文では表せない。「p 事実」タラ文も一応仮定文とは言えるものの、前件が事実であるため“要是 p, 就 q”では表せず、“p, q”“p 的话 q”でしか表せない。

次に、「発見」を表すタラ形式は中国語の“知觉动词”と“p 时, q”に最も近く、“知觉动词”と“p 时, q”で表せるタラ形式も「発見」のタラである可能性が極めて高い。

最後に、タラ形式の「行為成立」は基本的に中国語の“p 后, 就 q”に最も近く、“p 后, 就 q”で表せるタラ形式も「行為成立」のタラである可能性が極めて高い。(その他に“一 p, 就 q”と“p, 才 q”で表す場合もないことはない。) この点は今までの研究で触れていなかったものであり、新しく分かってきたものだといえるだろう。

「行為成立」は “p 后, 就 q” “一 p, 就 q” “p, 才 q”

「仮定状況」 ①要是 p 就 q ②p 的话 q ③一旦 p 就 q

「反事実文」 +①要是 p 就 q

「p 事実文」 ⑨p, q ②p 的话 q ⑥p 时 q

「発見」 ⑧p 知觉 q ⑥p 时 q ⑨p, q

「契機」 ⑨p, q ④一 p 就 q

| | | T-スコア | | MI-相互情報量 |
|---------------|------|-------|------|----------|
| II 行成+⑤p 后就 q | No.1 | 4.66 | No.3 | 1.53 |

| | | | | |
|------------------|-------|------|-------|------|
| I 仮定+①要是 p 就 q | No.2 | 4.38 | No.10 | 0.55 |
| VI 契機+⑨p,q | No.3 | 4.18 | No.5 | 0.87 |
| V 発見+⑧p 知覚 q | No.4 | 3.48 | No.1 | 3.29 |
| V 発見+⑥p 時 q | No.5 | 2.95 | No.2 | 1.94 |
| V 発見+⑨p,q | No.6 | 2.39 | No.11 | 0.53 |
| I 仮定+②p 的话 q | No.7 | 2.00 | No.13 | 0.48 |
| I 仮定+③一旦 p 就 q | No.8 | 1.61 | No.8 | 0.78 |
| IV 反実+①要是 p 就 q | No.9 | 1.59 | No.4 | 1.32 |
| III p 事実+⑨p,q | No.10 | 1.47 | No.6 | 0.79 |
| II 行成+④一 p 就 q | No.11 | 1.36 | No.14 | 0.38 |
| II 行成+⑦p 才 q | No.12 | 0.74 | No.9 | 0.58 |
| III p 事実+②p 的话 q | No.13 | 0.60 | No.7 | 0.79 |
| I 仮定+⑦p 才 q | No.14 | 0.60 | No.15 | 0.32 |
| VI 契機+④一 p 就 q | No.15 | 0.36 | No.16 | 0.15 |
| III p 事実+⑥p 時 q | No.16 | 0.30 | No.12 | 0.52 |

司会：2月14日（日）

丁鋒：fengd0761@ic.daito.ac.jp

田中寛：htanaka@ic.daito.ac.jp

大島吉郎：pal1kdz@yahoo.co.jp

須田義治：sudayosi1964@gmail.com

※研究発表者と概要

14-1. 劉爾瑟（大東文化大学博士後期課程）

テーマ：日本語受身文の成立条件再考

要旨：日本語において全ての動詞に受身文が作れるわけではない。三上章（1972）では動詞のなかで受身文が作れない動詞を「所動詞」と名付け、受身文が作れる動詞を「能動詞」と命名し、受身文の成否によって日本語の動詞を分類している。許明子（2004）では、三上（1972）の研究に踏まえ、動詞の分類に関する文献に基づき、所動詞の具体例をすべて挙げ、さらに下位分類を行っている。しかし、許（2004）で挙げられた所動詞には受身文が作れる動詞はあると思われるので、所動詞に関する再考を行う必要がある。

そして、他動詞を用いる受身文はよく見られるが、同じ他動詞で作られる受身文であっても必ずしも適格な文に限らない。これはどこに原因があるであろうか。さらに、中国語と異なり、日本語において自動詞でも適格な受身文が作れるが、不適格と考えられる自動詞の受身文もある。

- (1) そのうちに、八歳で父に死なれた私は、出先生を父のように思うようになった。
（渡邊恒雄：わが人生記）

后来，八岁就死了父亲的我把出先生当成了自己的父亲。(筆者訳)

(2) *富士山は先週、山田君に登られた。(高見健一 2011 : 12)

*上周富士山被山田爬了。(筆者訳)

(3) この山は、もう数百年も前に山頭火に登られている。(高見 2011 : 31)

这座山在几百多年以前被山头火登顶过。(筆者訳)

上記のように「死ぬ」などの自動詞を用いる日本語の受身文は少なくない。そして、同じ自動詞である「登る」を用いる例文(2)と(3)は、なぜ前者は不適格で後者は適格であるか。本稿では日本語における受身文の成立条件についても再び検討する。

14-2. 小路口ゆみ (大東文化大学博士後期課程)

テーマ：《老乞大》の四種の刊本における“把”構文の対照研究

要旨：本文は《老乞大》の四種の刊本(A旧本《老乞大》、B《老乞大諺解》、C《老乞大新釋》、D《重刊老乞大》)における“把”構文を統計・分析・考察する。

《老乞大》は14世紀の頃に朝鮮人が中国語を学ぶために書かれたテキストである。A本はおおよそ紀元1346年頃までに完成され、当時は元の至正年代であるため、元の時代の中国語の特徴をよく反映している。B本は紀元1480年までに成立し、当時の明初期の言語に基づいてA本を修正したものである。C本とD本は清の時代に修正された本であり、C本は紀元1761年に出版され、D本は1795年に出版された。この二種の刊本の出版は、わずか34年しか隔てていない。四種の刊本の内容は大体同じであり、言語も対応しているし、元、明、清の三朝にわたり、近代北方中国語の口語を研究する上で貴重な言語資料となっている。それぞれの刊本において使われた“把”構文の例文数は以下のとおりである。

A本：“把”構文：3例、“將”構文：15例

B本：“把”構文：4例、“將”構文：15例

C本：“把”構文：30例、“將”構文：3例

D本：“把”構文：30例、“將”構文：3例

四種の刊本における“把”構文(“將”構文を含める)の特徴及び“把”構文の歴史変化を探りたいと思う。

14-3. 湯 明昱・李 光赫 (名古屋大学文学研究科 博士後期課程・大連理工大学外国語学院 准教授)

テーマ：ノデIで表す原因・理由文の日中対照研究

要旨：日本語の原因・理由を表す代表的な形式にはカラ・ノデがあり、それらは中国語で“因为p、所以q”で表すのが普通だが、実際の対訳例から見ると必ずしもその通りではない。ノデIで表す原因・理由文を中国語では典型的な形式“因为p、所以q”のほか、“因为p、q”と“p、所以q”で表す場合も少なくない。つまり、ノデと“因为p、所以q”が必ずしも一対一で対応するとは限らない。また、継起関係を表す“p、就q”で表す場合もある。

本稿では、文中のノデの意味用法を「事態・行為の原因・理由」(ノデI)、「判断・発言・態度の根拠」(ノデII)に分けている。一方、中国語の因果複文は、物事の間因果関係を

説明する説明性因果複文と事実によって物事の間を関係する推論性因果複文の 2 種類に分けられている。このように、ノデで表す日本語の原因・理由文と中国語の因果複文の間に、共通点がある一方、相違点もあると思われる。しかし、これまでの原因・理由文に関する研究は主に両言語各自の範囲で研究をしており、日中対照の研究はそれほど多くとは言えない。そこで、本稿では原因・理由を表す文中のノデ I を研究対象にし、15 部の日本小説から対訳例を抽出し、「事態の原因」、「行為の理由」に分類して、分析を行い、対訳傾向をまとめ、日中両言語の原因・理由文の対応関係を明らかにしようとした。

その結果として、「事態の原因」と「行為の理由」を表すノデ I が、中国語では“(因为)p, (所以)q”類か“p、就 q”類で訳されている傾向があることが今回の調査で分かってきた。その対訳例の整理から、「事態の原因」が“(因为)p, (所以)q”類に、「行為の理由」が“(因为)p, 所以 q”と“p、就 q”“p, 于是 q”“p, 只好 q”類にそれぞれ意味的にも対応するのではないかという素朴な観察ができる。

14-4. 魏美平 (大東文化大学博士後期課程)

テーマ：日中両言語の可能表現に関する一考察 — 成立条件の視点から見ると —

要旨：日本語にも中国語にも可能表現があり、難しくないと思われる。両言語の可能表現の成立条件が異なるため、「ドアを開けようとしたが、開かない」の事象に対して、中国語では「想打开、但是打不开」のような対応表現の「ズレ」が存在している。これまでの可能表現の日中対照研究では成立条件を踏まえて両言語の相違点を考察する研究が必ずしも十分ではないため、本稿では両言語の成立条件を取りあげ、「可能」「実現」を表す可能表現に対して日中両言語の「可能」の本質に迫りながら、対照研究の視点から日中両言語における可能表現の共通性、個別性を考察することにしたい。主に、日本語の「可能」を表す自動詞構文に対して、中国語の実現可能である可能補語「V 不 C」が対応する。意志性が文脈に潜んでいる自動詞文は日本語の「可能」を含意する場合に、否定文が中国語の実現可能文に対応するものが多いが、肯定文はそうではない。このような現象に対して、日本語の成立条件を考察しながら可能形の接辞付加と動詞の意味特徴などから分析する。

14-5. 福本陽介 (名古屋産業大学)

テーマ：中国語の「時量詞 + (的) + 目的語」構文における「的」の生起と量詞強調効果について台湾人を対象とした一考察

要旨：本発表では、(1)(2)のように具体的数値を伴う時量詞を含む、中国語の「時量詞 + (的) + 目的語」構文の統語的・意味的特徴を考察し、(1b)(2b)の構造は構成素をなしており、「的」は情報的に時量詞を強調する機能を担うと主張する。

(1) a. 我喝了一个小时咖啡。

b. 我喝了[一个小时的咖啡]。

(2) a. 我换了三次水。

b. 我换了[三次的]水。

一般に、同構文での「的」の有無については、文の知的意味が変わらないためか、特段

の指摘はない(杉村(1994:123)、三宅(2012:172))。しかし、台湾人大学生 178 名を対象に「的」の有無と解釈について調査を行ったところ、表 1 のように、「的」を含む文の方が時量詞の強調効果が有意に高いことが分かった(カイ二乗検定)。

表 1 「的」の有無と時量詞の強調効果の関係

| | 強調なし | 強調あり | (期待値) | 強調なし | 強調あり |
|---|------|------|-------|--------|--------|
| 的なし | 1150 | 1164 | | 1083.5 | 1230.5 |
| 的あり | 1017 | 1297 | | 1083.5 | 1230.5 |
| X-squared=15.121, df=1, p-value 0.0001009 | | | | | |

本発表ではこの理由を以下のように説明する。

- ①「的」を含む構造は統語的構成素である。(「的」のない(1a)(2a)と統語的振る舞いが異なる。)
- ②「的」の生起により時量詞は目的語名詞の限定修飾語となり、同構造の特定性(specificity)が高まる。
- ③それゆえ修飾部は情報的に焦点になりやすく、それが母語話者には時量詞を強調していると認識される可能性がある。

14-6. 高橋弥守彦(大東文化大学)

テーマ：“上+客体”構造における“上”の文成分について

要旨：“上”は位置移動の動詞であり、その基本となる対象は空間詞である。筆者の分析によれば、“上+空間詞”を基本とする 4 構造(i “他上楼了。”[彼は階段をあがった。]、ii “他走上楼了。”[彼は歩いて階段をあがった。]、iii “他上楼去了。”[彼は階段をあがって行った。]、iv “他走上楼去了。”[彼は歩いて階段をあがって行った。])の“上”は述語である。また、以下に挙げる“上+客体”の“上”も述語である。

- (1) 上山。(場所、『八百詞』 p.302)
山に登る。(同上)
- (2) 上了年纪。(時間、『八百詞』 p.303)
年をとった。(同上)
- (3) 我正上着螺丝呢。(もの、『八百詞』 p.303)
私は今ネジをつけているところだ。(同上)
- (4) 车到下一站又上了几个人。(ひと、『八百詞』 p.302)
車が次の停留所に着くと、また何人か乗ってきた。(同上)
- (5) 上了两堂课。(こと、『八百詞』 p.302)
2 コマの授業をした。(同上)

本稿では下記の例文に見られるような、“上+空間詞”構造以外の 3 構造と空間詞以外の客体に用いる“上”の文成分について検討する。

- (6) 我也关上了房门。(『人民』 94-6-93)
私もドアを閉めた。(同上)
- (7) 从山下上来了几个人。(『八百詞』 p.304)

山のふもとから何人か登って来た。(同上)

(8) 录取名单又补上来三个人。(《通释》p. 122)

採用者名簿にまた3人が書き加えられた。

14-7. 鄒善軍 李光赫 (大連理工大学)

テーマ：日中対訳傾向から見るバ条件文の実証的研究

要旨：日本語のバ条件節は蓮沼等(2001)でその意味用法を五分類しているが、本研究ではその分類に基づき、バ条件文の日中対訳例(一本の小説ごとにヒット順で40例ずつ、25本から計1000例)を分析考察した結果、バ条件文における日中対訳関係(及び翻訳傾向)を以下の四点に纏めることができる。

- (1) メイン用法：バ条件文の五つの意味用法のうち、76.1%が一般習慣を表す用法であり、まさにバ条件文のメイン用法が一般習慣であると言えるだろう。
- (2) 無標文：ト・タラ形式の無標文の割合は半分以上を占めるのに対してバ形式中訳文ではその割合が約三割ほどしかなかった。主に潜在的な論理関係を表すバ形式はアクチュアルな事態を表すト・タラ形式とちがって中国語で有標文で表す傾向が強いと言える。
- (3) バ条件文の中訳傾向は、中国語のその意味・形式から、「論理関係(“只要”類)、假定表現(“如果”類)、継起関係(“就”類)、その他、無標」といった五種類に分けることができるが、その中で「假定表現」の割合が一番多い。
- (4) バ条件文の中訳傾向五分類を更に詳しく示すと“①只要、②才、③如果、④一旦、⑤的话、⑥时、⑦就、⑧其它、⑨p, q”といった9パターンになっているが、無標形式(“⑨p, q”)を除くと、“③如果”“⑦就”“①只要”などで訳されている傾向が見られた。

14-8. 許慈恵 張莉 (上海外国語大学)

テーマ：格助詞「に」の本質的意味への一考察 — 「に」格名詞と動詞との意味関係を通して

要旨：格助詞「に」には複数の意味項があり、前接名詞と後続動詞や形容詞(ここでは動詞のみの場合を見る)の意味及び両者の結合によって、そのうちの一つが実現されるわけであるが、複数の意味項は、それぞれ独立し、互いに離れつつ孤立的に存在するのではなく、また、近年の認知言語学研究のように「プロトタイプ」があり、メタファーやメトニミーなどの認知メカニズムによって意味拡張されるのでもないと考えられたい。

本研究では、コアスキーマ理論に立って、格助詞「に」には終始、本質的意味が存在し、すべての意味項に一様に貫かれているが、あくまでも複数の意味項に一貫した本質的意味は、それぞれ異なる「に」格名詞と動詞の意味特徴や、

またその両者の結合によりはじめて下位意味項として現れてくるのだ、という立場をとる。「に」の各意味項の前接名詞と後続動詞の意味環境を検討し、分析することによって、その本質的意味を考察する。結論として、「に」は、前接名詞が後続動詞実現の「成立点」、言いかえれば、後続動詞の事件の成立する「受け点」である、という仮説を立てる。

14-9. 彭 広陸 (中国・東北大学秦皇島分校)

テーマ：連体詞をめぐる——中国人向けの日本語教育文法の構築の観点から

要旨：「あくる日」「此の人」「どの山」「例の人」「或る人」における、もっぱら名詞を修飾する単語（下線部）が、松下大三郎（1928：128、134）では品詞の一つとして＜連体詞＞と呼ばれている。それは後の橋本文法に継承されている。橋本文法を基に形成された学校文法となると、名称が＜連体詞＞と改められている。この名付けは、この類の単語の構文的な機能を的確に反映するものとして評価すべきである。

一方、言語学研究会の文法体系では、＜連体詞＞は独立した品詞として認められていない。日本語教育文法でも、それ積極的に認められていないのが現状である。

しかし、品詞分類の原則から考えると、日本語文法においては、＜連体詞＞という品詞を立てるのにそれなりの理由があるわけである。そのみならず、中国語母語話者にとっても、＜連体詞＞という品詞に対しては何も違和感を覚えないはずである。なぜなら、中国語にも似たような品詞（＝区別詞）があるからである。

本発表は、＜連体詞＞の成立を考察し、それを独立した品詞として認める理由を明らかにした上で、中国語母語話者にとって＜連体詞＞という品詞が理解しやすいものだということ述べたいと思う。